

# 陽の里

発行 平成14年8月8日



社会福祉法人 新生会  
総合ケアセンター

サンビレッジ

No.79

2002年 **テーマ** 死を考える



▲ウォーターチェアで散歩に外へ出かける原崎さんと娘の洋子さん

その人らしい人生の終末に向けて

藤田保健衛生大学七栗サナトリウム教授 渡辺 正

サンビレッジへの訪問は今回で2度目になります  
が、生き生きと活動されている皆様から、講師のは  
ずの私がいとも元気をもらって帰途についています。  
そんな施設にはふさわしくない、「死」をテーマに  
した話をさせていただきました。「シッ、シッ！」  
と追い返されるのではと心配していましたが、あと  
で終末について話すきっかけとなった方々があると  
聞きホッとしています。ホスピス病棟では、患者さ  
んが、お亡くなりになりますと、病院玄関で職員が並  
んでお見送りをいたしますが、そんな折り、悲しみ  
の中にも満足感で晴れやかにしておられる家族を見  
ますと、癌に侵されながらも、命を全うしてくれた  
のだという身内の患者さんへの尊敬と誇りの念と、  
思い残すことなく介護できた満足感が伝わってきま  
す。また患者さんの中には、終末期にあってもユー  
モアを忘れず心配りされる方もあり、家族も私達医  
療者も逆に慰められたりしています。このような時  
命は自分だけのものではなく、沢山の絆から成り立  
っているものだとつくづく感じます。そしてその絆  
がうまく作動するためにも、自分や家族の終末につ  
いて、時にはおらかな気持ちで話題にしてはいか  
がでしょうか。

## ターミナルケア

クイーンエリザベス  
国際医療福祉教育研修センター  
プログラムマネージャー

## 洋子・マーフィー

オーストラリアのバララ  
ット市にあるクイーンエリ  
ザベスセンターでは緩和タ  
ーミナルケア病棟としてガ  
ンダーラと言う10床のユニ  
ットがある。ガンダーラと  
はアポリジニ（原住民）の  
言葉で、一時停止又は通路  
と言う意味で、現世界から



▲洋子さんと父親の原崎さん

次世界へ行く止まり道と言  
う事で名付けられた。

この一時停止・通過の時  
期を出来るだけ安楽に過ご  
しましょうと言うのが理念  
であり、緩和ケア（パリエ  
ティブケア）を強調している。  
ここはホテルのような雰囲  
気で、心を休ませる役割の  
ボランティアが沢山いるし、  
信仰面のカウンセラーもいる。  
家族は自由に自宅からペッ  
トの犬も連れてくるし、患  
者の好きな食事を家族が作  
れるキッチンもジェットバ  
スも設置されてある。

以前から医療福祉の専門  
家達から人間らしい死とい  
う事が大きな課題とされ、  
パリエティブケアやペイン  
マネジメント（疼痛管理）  
が専門分野となっている。  
苦しみながら、そしてマカ  
ロニ症候群になりながら死  
を迎えるのは人間らしい事  
ではない。痛みは誰でも硬

直させ鬱状態にもさせる。  
痛みや不快感というのは自  
分だけにしか解らない。6  
年前に弟が癌の末期で入院  
中に、看護婦がどれくらい  
痛いですかと聞いていたが、  
彼は痛いものは痛いんだよ  
と答えていた。全くその通  
りで、時々痛い、ちくちく  
痛い、動く痛い、等、全  
て痛い事には変わらない。  
顔や表情でも察し出来る。

80歳や90歳の殆ど寝たき  
り状態の老人に過剰な治療  
を施すのは苦痛にさせるだ  
けである。不動状態は苦痛  
であり、じょくそうも出来  
やすい。継続的点滴は浮腫  
を作る。大切なのは、意識  
が鮮明で元気なうちに、本  
人にどのような末期ケアを  
受けたいか考えてもらう事  
である。

オーストラリアでは老人  
施設に入所した時点で、話  
し合い、それ用の法的文書

もある。いくらパリエテイ  
ブケアやホスピスケアが立  
派なものに作られていても、  
『安楽死』を法律化せよと  
提唱する人は沢山いる。こ  
れ以上もう生きてくれないと  
言う人が、それを決めるの  
はその人の権利だと主張し  
ている。賛否両論だが、同  
情する人は増えている。

動物が末期で苦しんでい  
ると可愛そうだから死なせ  
てあげましょうと言うが、  
人間にはもう少し我慢して  
下さいとか、辛いでしょ  
ねとか言うが、それは苦痛  
のない人が言うことで、同  
情は簡単に出来る。QOL  
とは人間らしい事で、医療  
福祉従事者にとって重要な  
課題であり、一般社会の啓  
蒙にも貢献するべきである。

## 母のターミナルケア について

利用者家族 松岡 聡

サンビレッジ新生苑で昨年暮に亡くなった母は、89歳で入居し、その後6年間に多くの方にお世話いただきました。自分の家に近い状態の自由な面と、老人介護に熱心に取組む専門家の方々に守られているという安心な面を特に振り返って感じ



▲リースを手に、松岡須美さん

ます。姉が季節感に配慮するなど部屋を自分の家に近づける工夫をしたこともよかったです。

入居当時は非常に元氣のように思いましたが、毎年身体の衰えが進み介護の必要が多くなりました。最後の年は食が細くなり、とうとう飲むことも億劫がって自分から口にしなくなり、点滴の回数が増え出しました。そこで今後の対応の問題が起りました。4人の子供たちの総意は母の気持ちを考えて、「無理な延命はせず、病院での治療は最小限に留めたい」でした。点滴等も部屋で行なう範囲でというお願いを聞き入れていただき、最小限の点滴と、食べることや飲むことの努力を最後までしていただきました。お陰様で母は苦しむことなく、永眠いたしました。ターミナルケアとは、本人

の意志と尊厳に配慮した取り組みが重要なのだと考えます。

## 大切な人の「生と死」 に向き合って

スズラン棟リーダー

三島瑠利子

M氏は、咀嚼・嚥下能力の低下により口腔からの食事摂取が困難となってきた。そのため十分な食事・水分が摂取できず、低栄養・脱水・体力低下等の問題が見られるようになった。今後更に状態悪化も考えられる。

このような状況でM氏の夫が妻の「生と死」について真剣に向い合い考えた末「死で妻の最期を迎えること」を選択した。苑は生活の場であり病院のような特別な医療を受けることはできないことを理解しての決断だ

った。夫は余命は短くなるかもしれないが、短くなつた分今まで以上に妻との時間を大切にし、今自分のできることを精一杯やっていた。そして、夫はできる範囲の面会と介助を続けた。

ヘルパーは、体調の良い時に離床をすすめ、庭へ散歩に出かけたり、手を擦り音楽を流す五感に訴えるようなケアをすすめていった。口腔からの摂取がまったく出来なくなつてから一層夫とは密に情報交換し、M氏の苑での生活を支える話し合いを持った。二人の穏やかな時間が過ぎて行き、やがてM氏は73年の生涯を静かに閉じられた。

当苑では、ターミナルケア委員会というものがあつて、ここで「大切な方がその方らしくあるためへのメッセージ」という家族向けの事前指定書



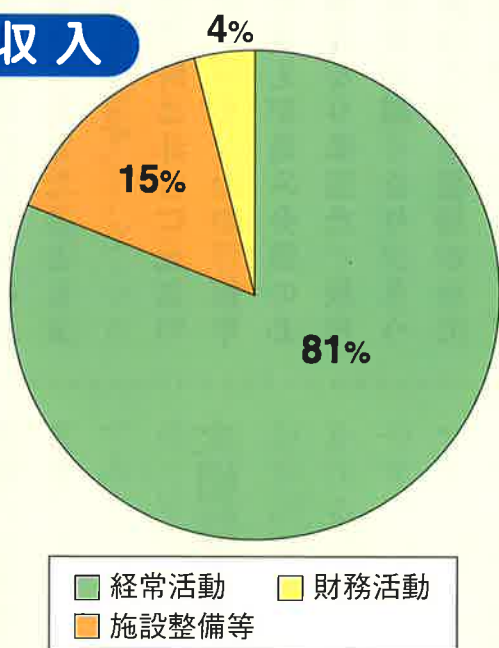
▲野原さん夫婦

を作成した。  
 これはやがて誰にも死は訪れる、その時々で今回のケースのように「命」の重みに家族の方々は悩まれることが多々ある。最期までその人らしくあるために、事前に家族で「生と死」について考える機会となればという思いからだった。  
 今年25名他界された内、苑でその意志を受けて19名の方をお見送りした。今年度は、本人向けの事前指定書を作成し、苑でよりよい生き方ができるような支えになればと考える。

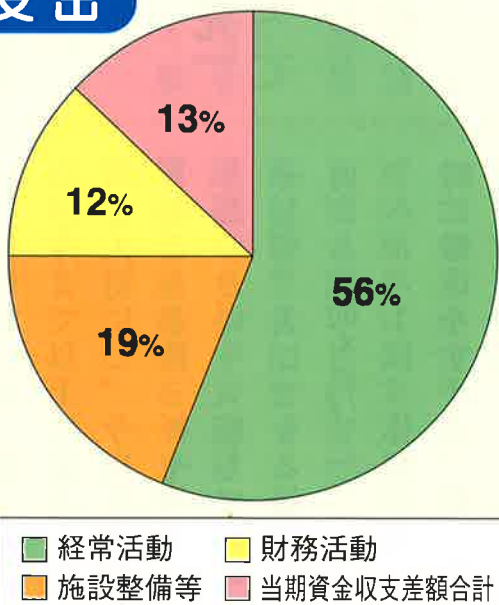
## 介護事業収支

(単位:千円)

### 収入



### 支出



勘定科目		金額	
経常活動による収支	収入	介護保険収入	940,497
		利用料収入	1,881
		事業収入	7,726
		経常経費補助金収入	451
		寄付金収入	2,196
		雑収入	6,808
		借入金利息補助金収入	478
		受取利息配当金収入	441
	支出	人件費支出	471,229
		事務費支出	44,302
事業費支出		135,343	
借入金利息支出		8,157	
経常活動資金収支差額		301,447	
施設整備等による収支	収入	施設整備等補助金収入	175,899
		施設整備等寄付金収入	192
		固定資産売却収入	30
	支出	固定資産取得支出	227,072
		施設整備等資金収支差額	-50,951
財務活動による収支	収入	借入金元金償還補助金収入	1,730
		積立預金・引当金取崩収入	45,989
		その他の収入	1,088
	支出	借入金元金償還金支出	76,215
		積立預金積立支出	59,000
		その他の支出	5,510
財務活動資金収支差額		-91,918	
当期資金収支差額合計		158,578	